

医療的ケア児、通常学級進学に壁 「社会の一員」断たれる関わり

毎日新聞 2021/7/17 19:24 (最終更新 7/17 21:18)



人工呼吸器と胃ろうをつけてバギーで登校した後、母綾乃さんと公園で過ごす佐野涼将さん(右) = 相模原市中央区で2021年7月12日、前田梨里子撮影

人工呼吸器やたん吸引などの医療行為を必要とする「医療的ケア児」を地元の公立小中学校で受け入れているか全国の県庁所在市と政令市、東京23区に毎日新聞が調査したところ、回答したうち受け入れ人数が10人に達しない自治体が8割に上ることが判明した。2割以上が0人だった。医療的ケア児は全国に2万人と推計されているが、障害児とともに学ぶ「インクルーシブ教育」は義務教育段階では地域で大きな差があることが浮き彫りになった。

「インクルーシブ教育」を国が掲げる一方、「医療的ケア児」の受け入れは進んでいない。相模原市中央区に住む佐野涼将（すずまさ）さん（8）は出産時のトラブルで脳に障害が残る。両親は神奈川県立特別支援学校から市立小への転校を求めているが、市教委からは認められていない。

涼将さんは、人工呼吸器とチューブで胃に栄養を送る「胃ろう」をつけ、言葉を発することは難しい重度障害児。小学校入学年齢になった2019年4月、両親は市立小への就学を市教委に要望した。市立小で人工呼吸器をつけた児童の受け入れは前例がなかったが、協議の結果、特別支援学校に在籍しながら、2年次の転校を目標に、母の綾乃さん（42）と週2～4日、市立小に通うことになった。

綾乃さんは「最初は小学校に行くのは抵抗があった」と話す。涼将さんの外出にはバギータイプの車椅子が必要で、通行人の視線が怖くてバギーのひさしを下げて隠すようにした。「元気に産んであげられなくてごめんね」と自らを責めた

涼将さんの兄で小学校に通っている長男が「（涼将さんに）来てほしい」と言ったことに背中を押された。学校見学に行った際、涼将さんが顔を真っ赤にしていたのを見て同世代との関わりが必要だとも感じた。

忘れられない出来事がある。遠足のコースに、バギーでは通れない階段があった。チームで時間内にゴールすることが目標だったが、同級生は「涼くんが下りられない」と平らな遠回りの道を選んだ。時間切れで到着して謝る綾乃さんに「みんなでゴールできたからいいんだよ」と声を掛けてくれた。

小学校で知り合った友達を通りかかると、「涼くん」と寄ってくる。居場所ができていくのを見て「社会の一員」と思えた。父の政幸さん（44）は「他の子どもと同じ時間を積み重ねれば偏見なく接してくれるようになるはず」と感じている。

しかし1年の3学期、市教委は「通常学級で細かな支援は難しい。学習の充実には特別支援学校のサポートも必要だ」と市立小への転校を白紙にし、支援学校に在籍しての市立小との交流継続を提案してきた。あくまで転校を希望する両親は県教委を交え、今も市教委と協議中だ。その間も綾乃さんは涼将さんをバギーに乗せて毎朝小学校に行き、同級生との交流を続けている。

相模原市では16年7月、障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者らが殺傷された。市は事件後に「共にささえあい生きる社会」を掲げている。綾乃さんは「相模原で事件が起きても自分は関係ないと思っている人もいる。涼将のような子がいると知って、関わってほしい」と話す。

今回の調査で市の受け入れは10人に満たなかった。医療的ケア児支援法は9月に施行される。市教委担当者は「保護者の主張はもっともだが、現場は問題が山積している。国は法律をつくるだけでなくもっと財政的な支援をしてほしい」と話した。【高田奈実】